

第3章

パラリンピアンに対する社会的認知度調査

調査概要

(1)調査目的

北京 2022 パラリンピック大会の開催に合わせ、パラリンピアンに対する社会的認知度を測定する。

(2)調査内容

主な調査内容は以下の通りである。

- ・北京 2022 パラリンピック日本代表選手認知度
- ・北京パラリンピックの観戦形態
- ・北京パラリンピック観戦後の感想

(3)調査対象

全国の市町村に在住する 20 歳以上の男女

(4)調査期間

2022 年 5 月 27 日(金)～2022 年 5 月 31 日(火)

(5)調査方法

インターネットによるウェブ調査
当財団調べ(マクロミルモニタを利用)

(6)回答結果

回答者数:2,060 人

東日本エリア/男性/20代	103	西日本エリア/男性/20代	103
東日本エリア/男性/30代	103	西日本エリア/男性/30代	103
東日本エリア/男性/40代	103	西日本エリア/男性/40代	103
東日本エリア/男性/50代	103	西日本エリア/男性/50代	103
東日本エリア/男性/60代以上	103	西日本エリア/男性/60代以上	103
東日本エリア/女性/20代	103	西日本エリア/女性/20代	103
東日本エリア/女性/30代	103	西日本エリア/女性/30代	103
東日本エリア/女性/40代	103	西日本エリア/女性/40代	103
東日本エリア/女性/50代	103	西日本エリア/女性/50代	103
東日本エリア/女性/60代以上	103	西日本エリア/女性/60代以上	103

(7) 調査報告並びにトピック内に示した図表の注意事項

- ・ 帯グラフにおいて 3%未満のデータラベルは非表示とした。
- ・ クロス集計においては、原則 χ^2 検定分析による有意差検定で処理して、有意水準 1% を▲▼、5%を△▽、10%を∴∴で表示するとともに、有意差が認められない場合には非表示とした。

要約

- ◆ 最も認知度が高い選手は「村岡桃佳」(11.6%)で、ついで、「岡本圭司」(5.6%)、「小栗大地」(4.5%)、「川除大輝」(4.2%)、「新田佳浩」(4.1%)、「高橋幸平」(4.1%)であった。
- ◆ 実施競技の正答率が最も高かったのは「村岡桃佳(アルペンスキー)」(46.9%)で、ついで、「川除大輝(クロスカントリー)」(27.2%)、「新田佳浩(クロスカントリー)」(24.4%)、「森井大輝(アルペンスキー)」(22.1%)、「岡本圭司(スノーボード)」(21.1%)であった。
- ◆ 北京パラリンピックの観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%で最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(31.3%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(7.7%)であった。観戦した競技は、「開会式」(39.3%)が最も多く、ついで、「アルペンスキー」(29.4%)、「スノーボード」(28.7%)、「閉会式」(22.9%)であった。
- ◆ 北京パラリンピックを観戦した感想は、「アスリートとして非常に優れていると感じた」が「よく当てはまる」「やや当てはまる」を合わせると約6割で最も多かった。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」が続き、いずれも5割を超えた。「2024年パリ・パラリンピックを直接観戦したい」は15.8%で、東京2020パラリンピック終了後の23.2%と比べると減少した。
- ◆ 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがあるかについて、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることある」は、2018年の平昌大会終了後の9.4%から、2022年の北京大会終了後に7.9%と減少した。

調査報告

1. パラリンピアン認知度

北京パラリンピックに出場したパラリンピアン 29 名を対象に認知度をたずねた。最も認知度の高い選手は、「村岡桃佳」であり、「知っている」「聞いたことがある」を合わせると、11.6%であった(図表 3-1)。ついで、「岡本圭司」5.6%(知っている:1.3%、聞いたことがある:4.3%)、「小栗大地」4.5%(知っている:1.0%、聞いたことがある:3.5%)、「川除大輝」4.2%(知っている:1.4%、聞いたことがある:2.8%)、「新田佳浩」4.1%(知っている:1.3%、聞いたことがある:2.8%)だった。前述の「知っている」「聞いたことがある」と回答した人を対象に実施競技についてたずねたところ、正答率が最も高かったのは「村岡桃佳(アルペンスキー)」の 46.9%だった。

図表 3-1 パラリンピアン認知度と正答率(上位 10 位)

NO	氏名	全体(N)	認知している (知っている+聞いたことがある)			知らない	競技名	正答率
			知っている	聞いたことがある				
1	村岡 桃佳	2201	11.6	4.5	7.1	88.4	アルペンスキー	46.9
2	岡本 圭司	2201	5.6	1.3	4.3	94.4	スノーボード	21.1
3	小栗 大地	2201	4.5	1.0	3.5	95.5	スノーボード	11.0
4	川除 大輝	2201	4.2	1.4	2.8	95.8	クロスカントリー	27.2
5	新田 佳浩	2201	4.1	1.3	2.8	95.9	クロスカントリー	24.4
5	高橋 幸平	2201	4.1	1.0	3.1	95.9	アルペンスキー	9.9
7	森井 大輝	2201	3.9	1.4	2.5	96.1	アルペンスキー	22.1
7	森 宏明	2201	3.9	1.1	2.8	96.1	クロスカントリー	12.8
9	藤原 哲	2201	3.9	0.9	3.0	96.1	アルペンスキー	9.4
10	佐藤 圭一	2201	3.7	1.1	2.6	96.3	クロスカントリー/バイアスロン	17.1
10	田中 佳子	2201	3.7	1.0	2.6	96.3	アルペンスキー	17.3

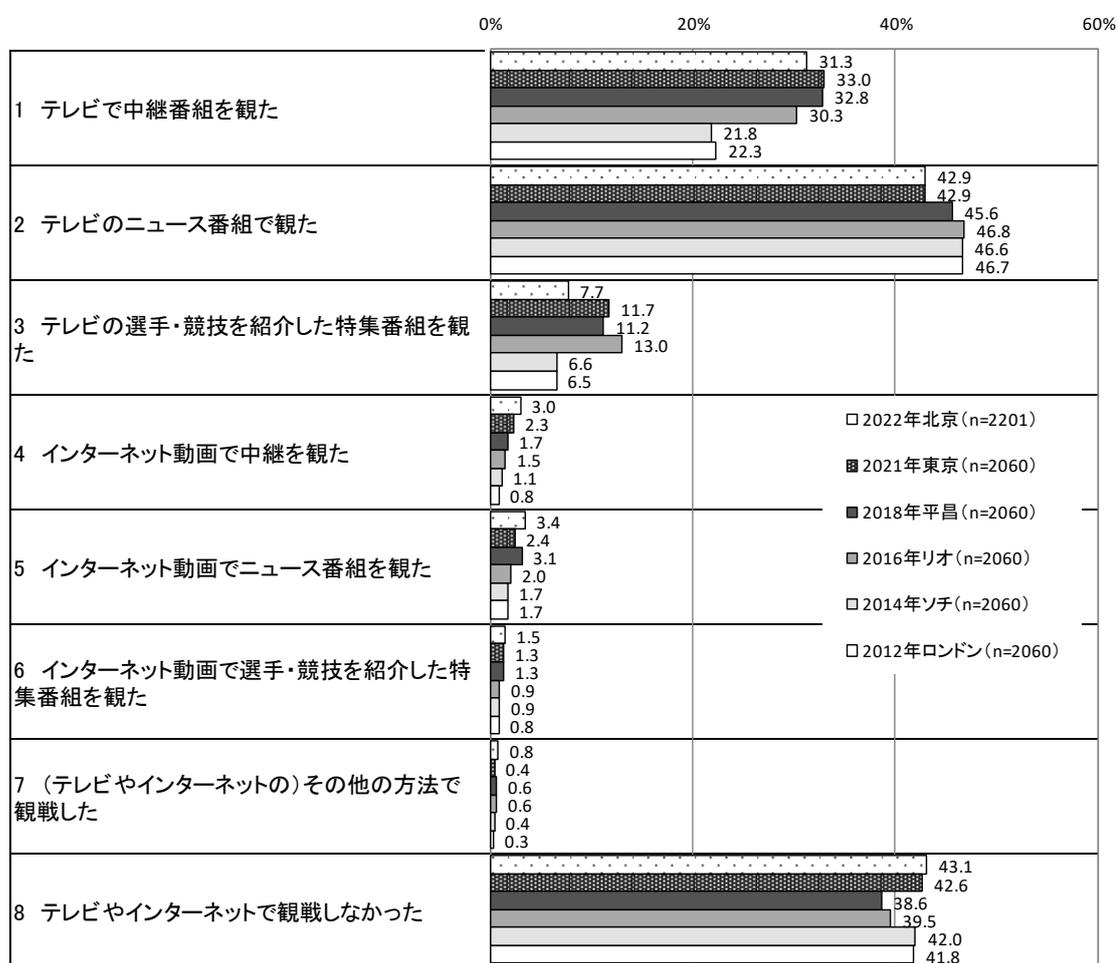
※正答率:クロスカントリー/バイアスロン両方に出場した選手の場合、いずれかを選択していたら正解とみなして集計した

2. パラリンピックの観戦

2.1 パラリンピックの観戦形態

北京パラリンピックの観戦形態についてみると、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%と最も多く、ついで「テレビで中継番組を観た」(31.3%)であった(図表 3-2)。観戦形態をたずねたこれまでの調査(夏季大会、冬季大会)と比べて、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」がほとんど変わらなかった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」も、ほとんど変化がみられなかった。

図表 3-2 過去 6 大会のパラリンピック観戦形態(複数回答)

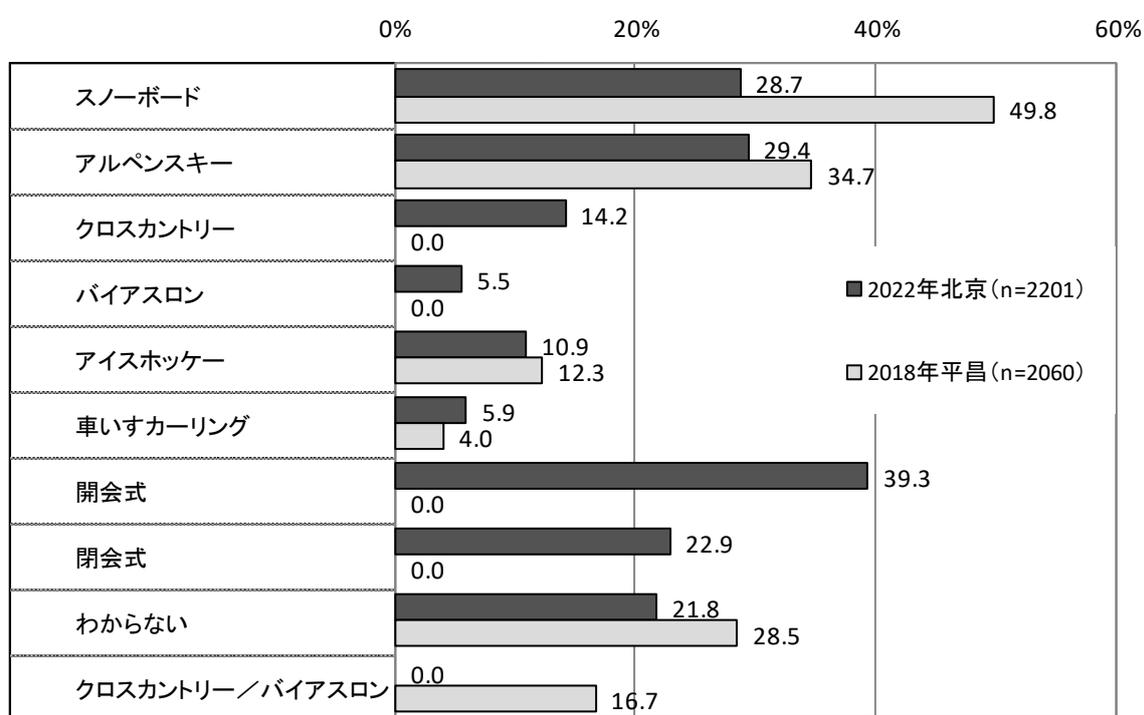


※2012 年大会は、2014 年度に調査を実施したため、調査条件が異なる。

2.2 観戦種目

テレビやインターネットで北京パラリンピック大会を観戦した人のうち、観戦競技についてたずねたところ、「開会式」が39.3%で最も多く、ついで「アルペンスキー」(29.4%)、「スノーボード」(28.7%)、「閉会式」(22.9%)であった(図表3-3)。平昌パラリンピック大会と比べると、「スノーボード」は49.8%(平昌)→28.7%(北京)、「アルペンスキー」は34.7%(平昌)→29.4%(北京)と減少した。

図表3-3 北京パラリンピックの観戦競技(複数回答)



※「開会式」、「閉会式」は2018年度調査では回答選択肢なし

※「クロスカントリー／バイアスロン」は2018年度調査では同一選択肢とし、2022年度調査ではそれぞれとしている。

2.3 北京パラリンピック大会観戦後の感想

テレビやインターネットで北京パラリンピック大会を観戦した人のうち、観戦した感想についてたずねたところ、最も多かったのが「アスリートとして非常に優れていると感じた」であった(図表 3-4、図表 3-5)。「よく当てはまる」(25.7%)と「やや当てはまる」(35.4%)を合わせると約 6 割であった。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」の 55.6%(よく当てはまる:16.0%、やや当てはまる:39.7%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」の 55.2%(よく当てはまる:13.4%、やや当てはまる:41.8%)であった。

これまでの調査との比較では、東京大会観戦後の感想と北京大会観戦後の感想を比べると、すべての項目において、東京大会から減少していた。さらに、同じ冬季大会の比較で、平昌大会観戦後の感想と北京大会観戦後の感想を比べると、すべての項目において平昌大会から減少していた。

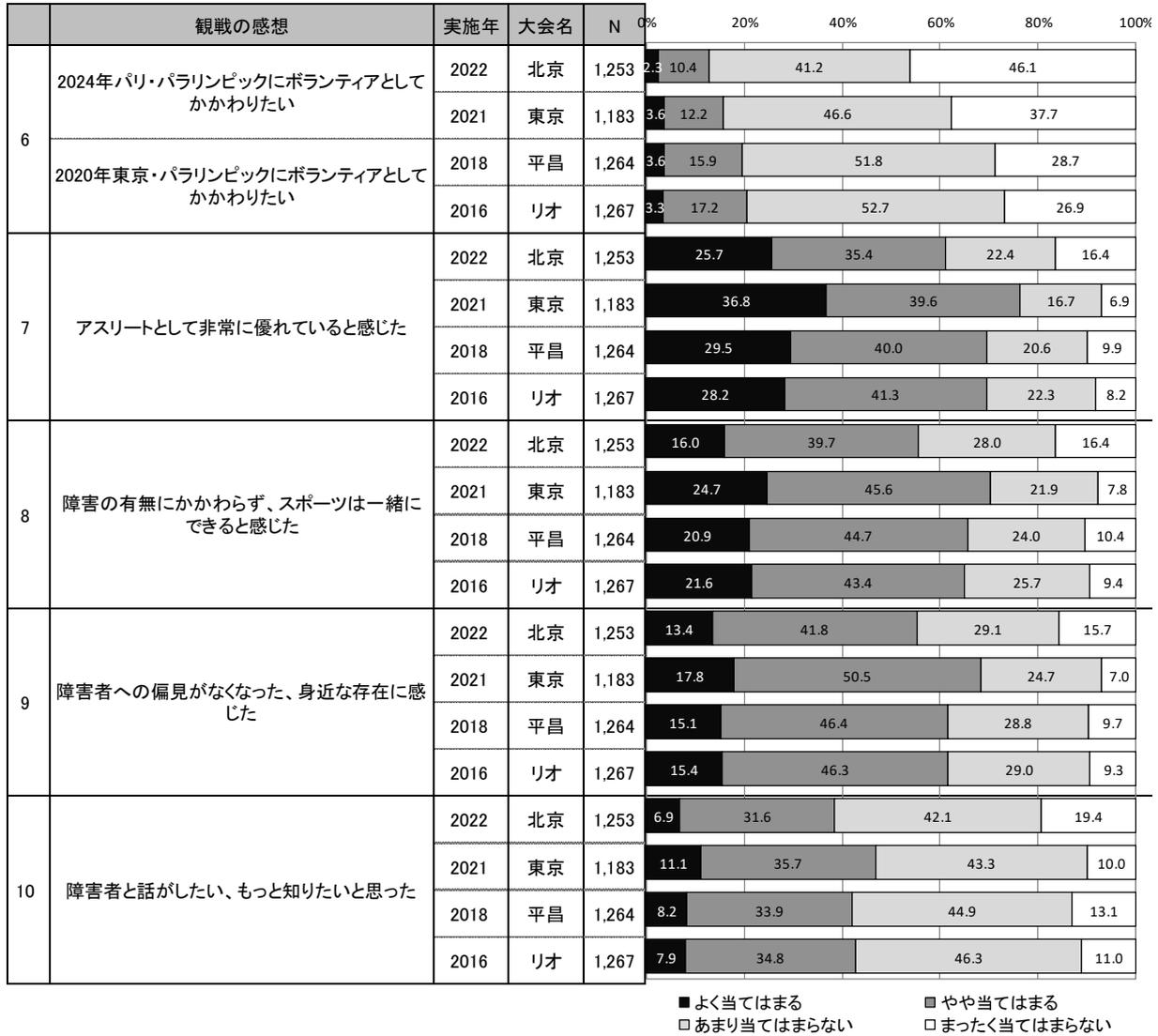
図表 3-4 北京パラリンピック大会観戦後の感想 1/2

	観戦の感想	実施年	大会名	N	%			
					0%	20%	40%	60%
1	障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	2022	北京	1,253	6.4	33.5	40.5	19.6
		2021	東京	1,183	11.8	42.5	36.4	9.2
		2018	平昌	1,264	6.7	37.4	43.3	12.6
		2016	リオ	1,267	5.9	37.1	44.4	12.6
2	障害者スポーツを直接観戦したい	2022	北京	1,253	3.6	20.0	48.1	28.3
		2021	東京	1,183	7.7	26.6	47.4	18.3
		2018	平昌	1,264	4.6	21.4	53.8	20.3
		2016	リオ	1,267	3.8	22.5	55.2	18.5
3	2024年パリ・パラリンピックを直接観戦したい	2022	北京	1,253	3.3	12.5	45.2	39.1
	2021	東京	1,183	5.7	17.5	48.0	28.8	
	2020年東京・パラリンピックを直接観戦したい	2018	平昌	1,264	9.3	25.9	44.9	19.9
		2016	リオ	1,267	9.1	26.1	46.6	18.1
4	障害者スポーツを体験したい	2022	北京	1,253	3.1	16.0	46.4	34.5
		2021	東京	1,183	5.7	22.2	48.6	23.5
		2018	平昌	1,264	3.3	18.1	53.4	25.2
		2016	リオ	1,267	4.3	16.8	54.1	24.8
5	障害者スポーツのボランティアをしたい	2022	北京	1,253	2.6	18.9	46.2	32.3
		2021	東京	1,183	4.7	21.6	50.2	23.5
		2018	平昌	1,264	3.9	19.3	53.2	23.6
		2016	リオ	1,267	3.9	17.1	56.8	22.2

■よく当てはまる ■やや当てはまる
 □あまり当てはまらない □まったく当てはまらない

選手の認知度

図表 3-5 北京パラリンピック大会観戦後の感想 2/2

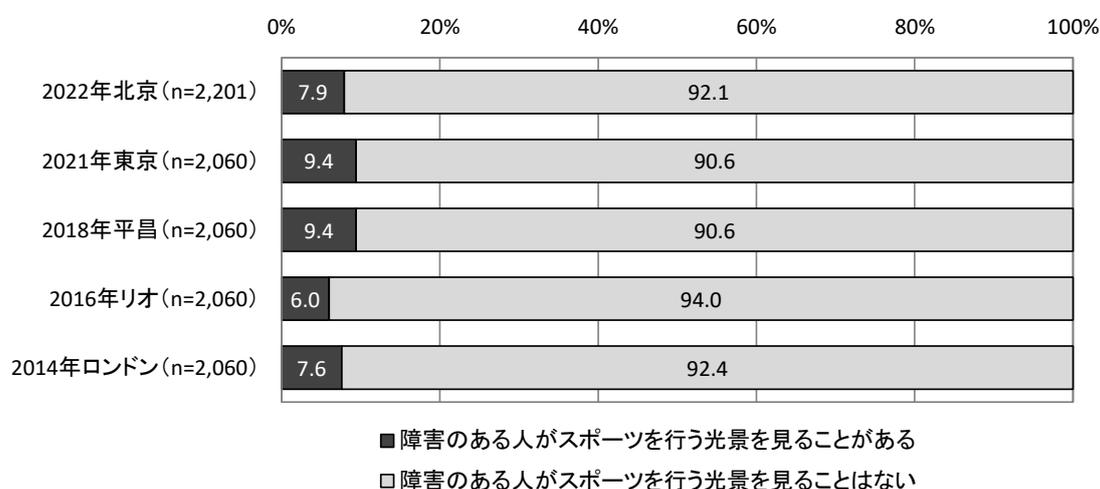


3. 障害者スポーツとの接点

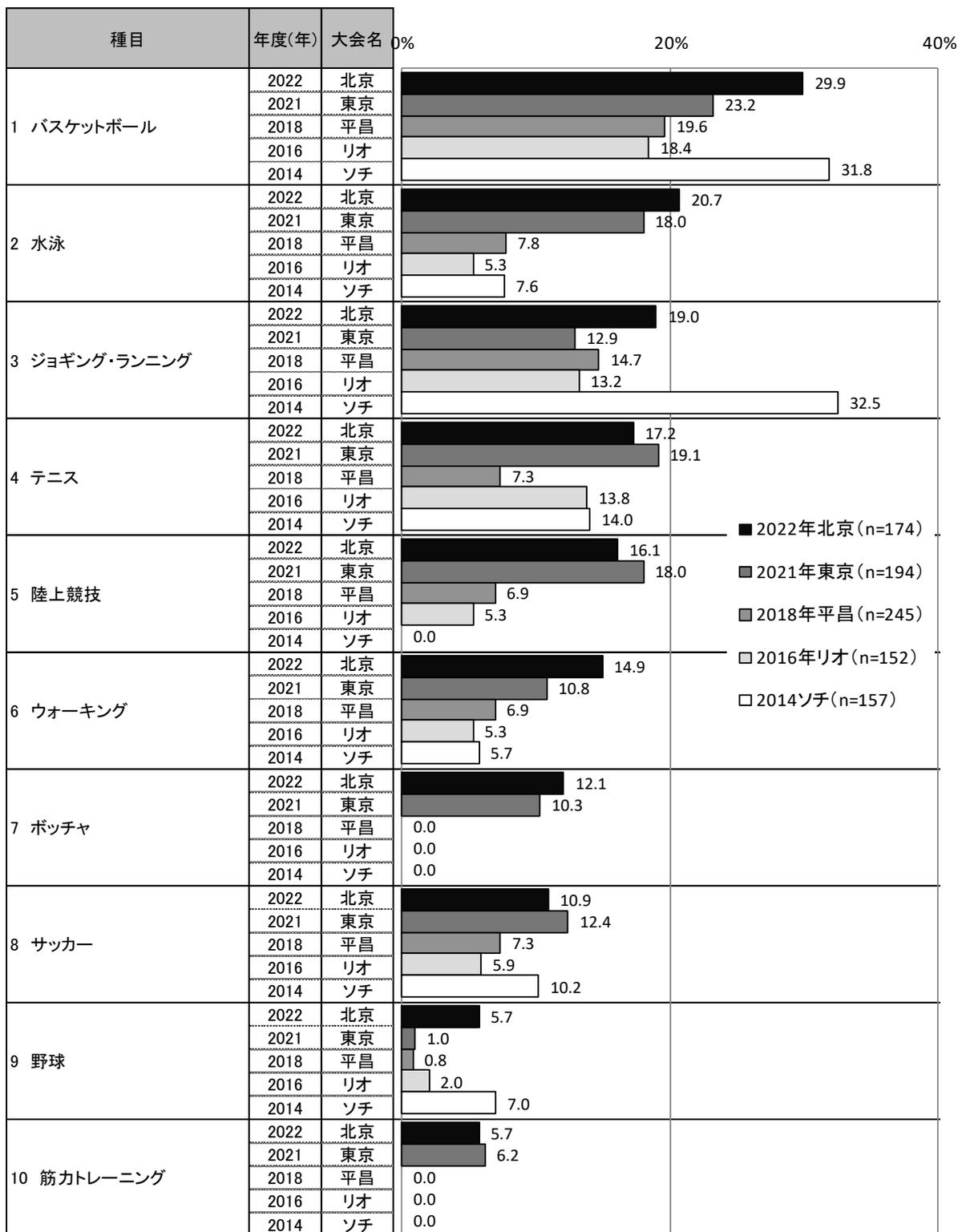
3.1 障害のある人がスポーツを行う光景・種目

日常生活の中で人々がスポーツを行う光景を見ることがあるかについてたずねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」は、2021年度調査の9.4%から7.9%に減少した(図表 3-6)。見たスポーツの種目は、「バスケットボール」が最も多く、ついで、「水泳」「ジョギング・ランニング」「テニス」「陸上競技」であった(図表 3-7)。

図表 3-6 障害のある人がスポーツを行う光景



図表 3-7 障害のある人がスポーツを行う光景で見る種目一覧(複数回答)



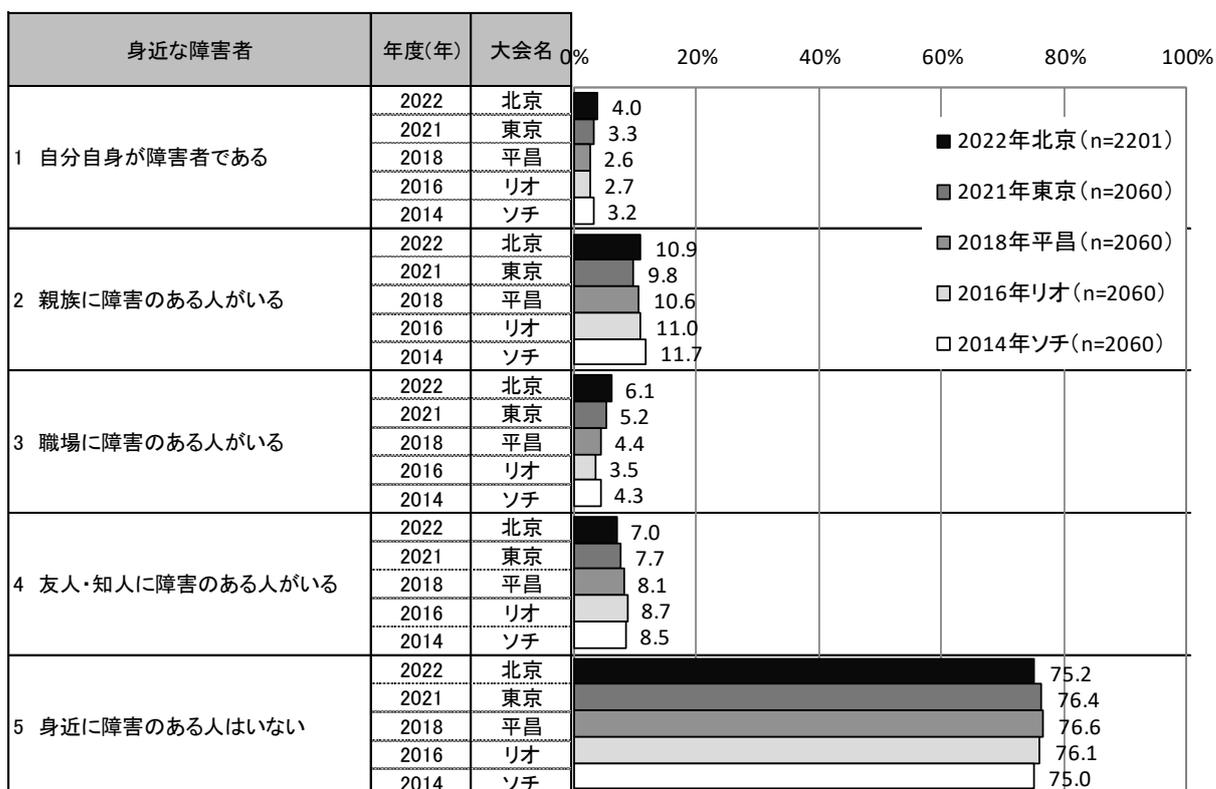
※2022年の選択肢の降順(上位10種目を掲載)

※選択肢「筋力トレーニング」「ボッチャ」は2018年～

3.2 身近にいる障害のある人

身近にいる障害のある人についてたずねたところ、「身近に障害のある人はいない」が75.2%で最も多く、ついで、「親族に障害のある人がいる」(10.9%)、「友人・知人に障害のある人がいる」(7.0%)であった。「自分自身が障害者である」は4.0%であった(図表3-8)。

図表 3-8 身近にいる障害のある人の有無



選手の認知度

4. クロス集計

身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦形態についてみると、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に高かった(図表 3-9)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「テレビの中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に低かった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」非実施層は、「身近に障害のある人はいない」が1%水準で有意に高かった。

図表 3-9 身近に障害のある人の有無別にみるパラリンピック観戦形態

		全体	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった
全体		2,201	31.3	42.9	7.7	3.0	3.4	1.5	0.8	43.1
あなたの身近に障害のある人がいますか。	自分自身が障害者である	87	33.3	41.4	11.5	6.9	3.4	4.6	2.3	44.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	487	▲36.8	▲48.5	▲11.9	▲5.5	▲5.7	▲3.5	▲2.3	▼32.4
	身近に障害のある人はいない	1,655	▼29.7	▼41.5	▼6.5	▼2.3	▼2.8	▼0.9	▼0.4	▲46.0

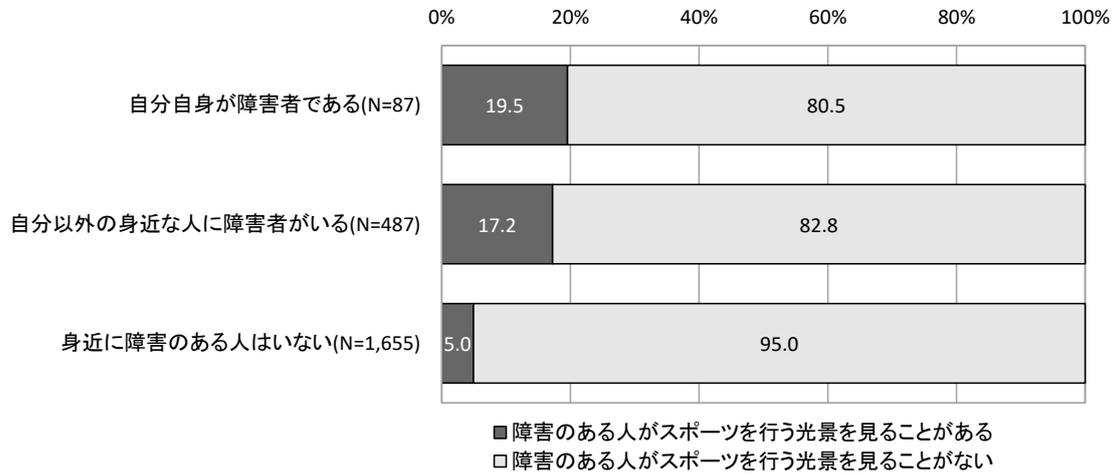
身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦を感想別にみた。「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に高かった(図表 3-10)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に低かった。

図表 3-10 身近に障害のある人の有無別にみる観戦後の感想

		全体	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない					
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: auto;"> 【全体との差の検定】 有意水準 高 低 1% ▲ ▼ 5% △ ▽ 10% ∴ ∵ </div>									
障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	全体	1,253	6.4	33.5	40.5	19.6					
	自分自身が障害者である	48	10.4	35.4	41.7	12.5					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲10.3	△39.5	▽35.3	▽14.9					
	身近に障害のある人はいない	894	▼4.9	▽31.5	∴42.2	△21.4					
障害者スポーツを直接観戦したい	全体	1,253	3.6	20.0	48.1	28.3					
	自分自身が障害者である	48	△10.4	22.9	41.7	25.0					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	4.0	▲28.0	47.1	▼21.0					
	身近に障害のある人はいない	894	3.1	▼17.3	48.5	▲31.0					
2026年 ミラノ・コルティナダンベツォ・パラリンピックを直接観戦したい	全体	1,253	3.3	12.5	45.2	39.1					
	自分自身が障害者である	48	△10.4	▲27.1	35.4	27.1					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	4.9	△16.4	43.2	35.6					
	身近に障害のある人はいない	894	▽2.6	▼10.6	46.1	∴40.7					
障害者スポーツを体験したい	全体	1,253	3.1	16.0	46.4	34.5					
	自分自身が障害者である	48	▲12.5	25.0	▽29.2	33.3					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲6.1	▲21.0	45.6	▼27.4					
	身近に障害のある人はいない	894	▼1.9	▼13.8	47.3	▲37.0					
障害者スポーツのボランティアをしたい	全体	1,253	2.6	18.9	46.2	32.3					
	自分自身が障害者である	48	△8.3	27.1	▽31.3	33.3					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲4.9	▲24.9	44.4	▼25.8					
	身近に障害のある人はいない	894	▼1.6	▼16.4	47.3	▲34.7					
2026年 ミラノ・コルティナダンベツォ・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	全体	1,253	2.3	10.4	41.2	46.1					
	自分自身が障害者である	48	△8.3	16.7	35.4	39.6					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	∴4.0	△13.7	41.0	∴41.3					
	身近に障害のある人はいない	894	▽1.7	▽8.9	41.3	△48.1					
アスリートとして非常に優れていると感じた	全体	1,253	25.7	35.4	22.4	16.4					
	自分自身が障害者である	48	22.9	41.7	20.8	14.6					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	∴29.8	36.5	21.3	▽12.5					
	身近に障害のある人はいない	894	∴24.3	35.0	22.8	△17.9					
障害の有無にかかわらず、スポーツと一緒にできると感じた	全体	1,253	16.0	39.7	28.0	16.4					
	自分自身が障害者である	48	16.7	43.8	27.1	12.5					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	∴19.1	△45.6	▽22.8	▽12.5					
	身近に障害のある人はいない	894	15.0	▽37.5	△29.8	△17.8					
障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	全体	1,253	13.4	41.8	29.1	15.7					
	自分自身が障害者である	48	∴22.9	37.5	25.0	14.6					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲18.8	45.6	▼23.1	∴12.5					
	身近に障害のある人はいない	894	▼11.3	40.6	▲31.3	16.8					
障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った	全体	1,253	6.9	31.6	42.1	19.4					
	自分自身が障害者である	48	△16.7	37.5	▽25.0	20.8					
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲11.2	▲38.6	▽36.5	▼13.7					
	身近に障害のある人はいない	894	▼5.1	▼29.1	△44.4	▲21.4					

身近に障害のある人の有無別に、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無についてたずねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」では、「身近に障害のある人はいない」(5.0%)が、「自分自身が障害者である」(19.5%)の約4分の1、「自分以外の身近な人に障害者がいる」(17.2%)の約3分の1だった(図表 3-11)。

図表 3-11 身近にいる障害のある人の有無別にみる
障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無



日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無についてみると、日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがある人の方が、「テレビで中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」において、1%水準で有意に高かった(図表 3-12)。

図表 3-12 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別にみる
北京パラリンピック大会の観戦形態

		全体	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった
		(%)								
全体		2,201	31.3	42.9	7.7	3.0	3.4	1.5	0.8	43.1
あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景をみるがありますか。	ある	174	▲50.0	46.6	▲13.8	▲13.8	▲10.3	▲6.3	△2.9	▼24.1
	ない	2,027	▼29.6	42.6	▼7.2	▼2.0	▼2.8	▼1.0	▼0.6	▲44.7

【全体との差の検定】
有意水準 高 低
1% ▲ ▼
5% △ ▽
10% ☆ ☆

選手の認知度

5.まとめと考察

本調査の回答対象とした北京パラリンピックに出場した29名のパラリンピアンのうち、最も認知度の高い選手は「村岡桃佳」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は11.6%だった。第2位は「岡本圭司」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は5.6%だった。2018年度調査の第1位は「成田緑夢」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は50.9%と、回答者の過半数が成田選手を認知していた。

2018年度調査の第2位は、「村岡桃佳」で「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は9.6%だった。村岡選手の認知度は、平昌大会から2ポイント増加したことになる。

北京大会の認知度上位10名のうち、平昌大会にも出場した選手は4名いたが、村岡選手以外の3名はいずれも認知度が平昌大会から減少する結果であった。本調査は、北京大会終了後、2か月後に実施された。北京大会も東京大会同様、コロナ禍での開催となったため、大会で活躍した選手がメディアに登場する機会が減ったこと、ロシアによるウクライナ侵攻が北京大会の開催期間中も行われていたことから、国民の意識も北京大会終了後の“余韻”に浸ることなく、すぐにロシア・ウクライナ問題を目にする機会が増えたことが原因だと推察できる。

過去6大会のパラリンピックの観戦状況についてみると、「テレビやインターネットで観戦しなかった」非観戦層は、約4割と、これまでと大きな変化はみられなかった。非観戦層は、時差のない国内開催であり、メディアが多くの放送時間を費やして機運醸成につとめた東京大会でも変わることはなかった。さらに、ロシア・ウクライナ問題があった北京大会でも非観戦層が増加することもなかった。もともとパラリンピックに興味がない層と言い換えることもできるが、非観戦層の分析は今後の課題の一つと言えるだろう。一方で、北京大会を東京大会と比較すると、テレビで中継や特集番組を観た人が減った半面、インターネットで中継や特集番組を観た人が増加した。インターネット視聴は、パラリンピック観戦に限らず、社会的な観戦形態の変化と言えるが、パラリンピックにもその影響が出始めた大会と言えるかもしれない。

パラリンピック観戦後の感想については過去4大会でたずねている。ほとんどの設問において、リオ大会、平昌大会では同様の結果を示し、東京大会で増加、北京大会で平昌大会と同様の結果に戻った。この結果から、東京大会が国民に与えたインパクトの大きさを測り知ることができるのと同時に、東京大会で感じた思いが翌年の北京大会まで継続できていないことも示された。

身近な環境に障害者がいることが自身の行動、本調査においては、パラリンピックの観戦状況やパラリンピック観戦後の感想に影響を与えていることが、過去の調査同様、再確認できた。

(小淵和也)

